

(別紙8)

【認知症対応型共同生活介護用】

1. 評価結果概要表

作成日 平成 20年12月 2日

【評価実施概要】

事業所番号	0170501969		
法人名	有限会社 札幌福祉サービス		
事業所名	グループホーム いこいの家		
所在地	札幌市厚別区上野幌1条6丁目1番25号 電話 011-896-6517		
評価機関名	株式会社 社会教育総合研究所		
所在地	札幌市中央区南3条東2丁目1		
訪問調査日	平成20年11月27日	評価確定日	平成20年12月9日

【情報提供票より】 (平成20年11月1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	昭和(平成)15年4月21日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	8 人	常勤 5 人, 非常勤 3 人, 常勤換算3.9人	

(2) 建物概要

建物構造	木造モルタル 造り
	2階建ての 1.2 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	45,000~55,000 円	その他の経費(月額)	光熱水費: 16,000 円 暖房費(11-3月):5,000 円
敷金	有() 円) (無)		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有() 円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	400 円	昼食 450 円
	夕食	450 円	おやつ 円
	または1月当たり 円		

(4) 利用者の概要(11月1日現在)

利用者人数	9 名	男性 3 名	女性 6 名
要介護1	1 名	要介護2	2 名
要介護3	4 名	要介護4	1 名
要介護5	1 名	要支援2	0 名
年齢	平均 85 歳	最低 76 歳	最高 96 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	新札幌聖陵ホスピタル・ハーブ歯科矯正歯科
---------	----------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

グループホーム「いこいの家」は、運営者が以前市役所の福祉関係の仕事に就いていた経験から、お年寄りの役に立ちたいと言う思いで立ち上げられた。建物は、運営者が以前住んでいた自宅を利用して造られたもので、違和感なく地域に溶け込んでいる。室内も一般住宅と同じ造りのため、車椅子の移動など多少不便な面はあるが、利用者は自宅にいる時のように落ち着いた雰囲気や家庭的な生活を送っている。管理者は、自分の親を入れたいような、楽しく笑って暮らす事が出来るグループホームをめざし日々介護に取り組んでいる。職員も管理者の思いを理解し、感謝や笑顔を大切にして利用者として明るく接しており、居間で過ごす利用者には明るい笑顔や楽しい会話があふれている。

重点項目① 前回評価での主な改善課題とその後の取組、改善状況(関連項目:外部4)

ホーム便りの毎月発行、栄養士による栄養バランスチェック等の取り組みは不十分であるが、理念の見直し、自己評価への全職員参加、市町村との連携、終末期に向けた話し合い、面会簿の変更等は積極的に取り組みが行われている。

重点項目②

今回の自己評価は、前回の外部評価を踏まえ、自己評価表を全職員に渡して、それぞれの職員の解る項目について記入して貰い、管理者がまとめて作成している。管理者や職員は、自己評価を行う事により、日頃の仕事の再確認をすると共に、利用者への関わり方を反省する良い契機になったと捉えている。

重点項目③

運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)

今年度は運営推進会議を4回開催し、町内会長、家族、ボランティア代表、民生委員、介護予防センター職員、管理者、事業主、職員が参加し、運営状況、外部評価の結果などについての話し合いと、権利擁護などについての勉強会が行われている。前回の外部評価の取り組みである基本理念、運営理念についての見直しも3回話し合いが行われ、新たな事業所独自の運営理念を作成し日々の介護や運営に役立てられている。

重点項目④

家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)

季節毎に「いこい便り」を発行したり、家族と話す事により利用者の様子を報告している。来訪が少ない家族には、金銭出納報告と共に写真や手紙を送付して家族が安心出来るように配慮している。玄関に数項目のアンケートを準備したり、家族の来訪時に積極的に話しかける事により、家族の意見や不満を引き出せるように工夫している。家族から出された意見や些細な言葉も記録し、職員で話し合い、記録を確認する事により情報を共有するようにしている。

重点項目⑤

日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)

町内会に加入して、秋祭りや公園の草むしり、掃除などに利用者の状況を見ながら一緒に参加しているが、利用者の介護度も高くなり、以前のような参加はだんだん難しくなってきた。現在は、学生ボランティアや囲碁ボランティアの方の訪問を受けたり、散歩や玄関先での日向ぼっこなどで近隣の人と挨拶や会話を交わす事により地域の人々との交流に努めている。

2. 評価結果（詳細）

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	前回の外部評価を踏まえ、職員も参加した運営推進会議において、開設以来の理念を見直し「利用者本位」「家族交流と連携」「資質の向上」「地域交流と貢献」という4項目の事業所独自の基本理念を作成している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	基本理念、ケア理念は管理室、ホールの壁に貼る事により職員が常に意識出来るように工夫し、ミーティングや日頃の介護においても確認するようにしている。職員も理念をよく理解し、利用者や家族、地域との繋がりを深め、サービスの向上に日々努力している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会に加入して、秋祭りや公園の草むしり、掃除などに利用者の状況を見ながら一緒に参加しているが、利用者の介護度も高くなり以前のような参加は難しくなっている。学生ボランティアや囲碁ボランティアの訪問を受けたり、戸外に出て挨拶を交わしたりして地域の人々との交流に努めている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の自己評価は、前回の外部評価を踏まえ、自己評価表を全職員に渡して、それぞれに解る項目について記入して貰い管理者がまとめ上げている。自己評価を行う事により、日頃の仕事の再確認をすると共に、利用者への関わり方を反省する良い契機になったと捉えている。前回の取り組み項目は、理念の見直しなど、殆ど取り組みが行われている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は運営推進会議を4回開催し、町内会長、家族、ボランティア代表、民生委員、介護予防センター職員、管理者、運営者、職員が参加し、運営状況、外部評価の議題に加え、基本理念、運営理念についても3回話し合いが行われ、新たな事業所独自の運営理念を作成し日々の介護や運営に役立てられている。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	前回の外部評価を踏まえて取り組みが行われ、区役所に訪問しておむつサービスの利用や市内の福祉施設の一覧表などの情報収集を行っている。計画作成担当者である介護支援専門員は、介護認定の更新などの手続き代行の他にも介護関連の資料を収集し、事業所のサービス向上に活用するなど、区役所との関わりを深めている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	「いこい便り」を季節毎に発行し、利用者や行事の様子、新しい職員などを報告している。家族の来訪時には、利用者が楽しく暮らしている様子を話したり、来訪が少ない家族には、金銭出納報告と共に写真や手紙を送付し、家族が安心出来るように配慮している。	○	「いこい便り」に、利用者一人ひとりの様子を記入するなど、利用者の暮らしぶりを家族に伝えて行くような工夫をし、ホーム便りの内容がより一層充実するよう期待したい。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に目安箱を設置し、数項目のアンケートや、家族の来訪時に、積極的に話しかける事により、家族の意見や不満を引き出せるように工夫している。家族からの意見や些細な言葉も記録し、職員で話し合い、記録を確認する事により情報を共有するようにしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人内に他の事業所があるが、職員の異動は現在行われていない。職員の離職により利用者が不安になる事があるので、離職者については利用者に説明する事なく、聞かれた時は「休んでいる」と伝えて安心して貰うようにしている。		


外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修は、職員の能力や経験に応じて参加出来る様に配慮しているが、今年度は利用者の状態が不安定であったり、職員の交代により積極的に外部研修への参加は行われていない。内部研修の時間確保も難しく、申し送り時に研修報告をしたり、運営推進会議に職員も参加して、権利擁護などについての研修を行っている。	○	利用者の状況も安定し、職員も定着してきているので、来年度は職員の習熟度に応じた研修に努めて行きたい意向なので、その取り組みを期待したい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	厚別区の管理者連絡会を通じ、管理者が中心となり他のグループホームの見学会を計画して開催している。今年度で2回目であるが、職員は他の事業所を訪問する事により、共有スペースの利用方法や献立、介護などを参考にして日々の介護やサービスに役立てている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前に家族や本人に訪問して貰ったり、管理者や計画作成担当者が自宅や病院を訪問して馴染みの関係を作るように配慮している。体験入居を勧めたり、入居後馴れない事で不安になる時は、家族に協力して貰って一時帰宅をしたり、利用者の生活スタイルを把握して徐々に生活に慣れるよう配慮している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者を親の様に思い、人生の先輩として教えて貰う事が多いと考えている。料理や昔の生活の事を教えて貰ったり、職員が忙しく動いていると「人の話を良く聞きなさい」と言われ、自分の行動を改めるよう気づかされたりする事が多く、日々の介護の中で利用者に学ぶ事が多いと感謝している。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉で表現することが難しい思いや意向を、表情や動作、行動などを観察することで把握するように努めている。会話の内容を家族に確認することで生活歴を知ることがあり、経過記録に記入し全職員で共有し理解を深めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	新規作成の場合は、介護支援専門員が本人や家族から生活歴や日常生活の様子などを聞き取り、担当職員が計画の原案を作成している。その後、介護支援専門員や管理者が確認し、職員会議にて意見交換を行い、介護計画を作成、本人や家族の意向を再確認している。心身の状態に応じて現在、2名の利用者が説明を受け、署名をしている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月に1回定期的に見直しをしている。また食事の様子に変化がみられる、誤嚥の危険性が生じ調理形態を工夫する必要がある、トイレでの排泄からおむつの使用を検討するなどの心身の状態や入院時の変化を含めて、その都度見直しを行い、介護計画を作成している。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	医療連携体制があり、看護師が勤務しているので、利用者の状態を把握した上で事業所で対応できることもある。また、通院や買物などは、管理者が公休日を活用して介助を行うなどの工夫をしている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医を継続して受診することは可能である。家族から協力医療機関への変更希望が出されることもあるので遠隔地などのため通院が難しい場合は、協力医療機関の往診時に服薬の調整などを行っている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居時に書面にて家族と話し合いを行っている。家族から「事業所での看取りは可能であるか」という質問もあるが医療行為が必要となる場合は入院となることを説明している。主治医の判断で入院となるが医療行為が必要ない看取りであれば、対応していきたいと考えている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	一人ひとりの状態に応じて友達のような言葉や尊敬語を使い分けている。トイレの介助を行う時は、耳元でその人に分かる言葉を使うようにしている。来訪者の面会簿は設置せず職員が記録し、個人情報に関しては2階の事務所に保管している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事、入浴などの大まかな日課はあるが、それ以外は決まっていない。利用者が意思を表現することが難しいこともあるので、職員がボール投げや歌を歌ったり、昔の映画を観るなどの働きかけを行っている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は、利用者の希望を聞きながら職員が1週間分を作成している。食材は共同購入で毎週配達されるが、週に1回はパン食を取り入れるなどの利用者の嗜好に配慮している。林檎や柿などの果物の皮むきや食事の盛り付け、下膳などができるよう支援している。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	毎日、午後に入浴しているが体温や血圧、脈拍の状態によっては午前に入浴する場合もある。以前、夜間に入浴することもあったが隣室の利用者から音について苦情があり、現在は行っていない。拒否がある場合は無理強いせず、時間を変更するなど対応している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	刺し子や編み物、塗り絵などをしていたが、最近では意欲や記憶力の低下により、動作が難しくなっており、課題として捉えている。ボランティアと居室で囲碁をしたり、洗濯物を畳むなどの楽しみや役割を持つことができるよう支援している。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	日常的には、玄関のベンチで日光浴や外気浴をしたり、住宅街を散歩している。心身機能が低下してきているため、可能な範囲で外出するように努めている。冬季の外出は減少傾向であるが、買物の外出などは個別に対応している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関に出るフロアのドアにセンサーを設置し、出入りを把握している。日中は施錠していないが、入居間もない時期に帰宅願望が強い場合は、安全のために内側から施錠することもある。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年に2回、火事や地震を想定しての避難訓練や緊急時の対応として、利用者を玄関まで誘導するなどの訓練を行っている。消防署の指導は受けていないが、運営推進会議で地域の人々への働きかけをしており、協力態勢を整えている。		
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	「生活状況チェック表」に食事、水分量を記録している。食事以外に1日1500cc前後を摂ることができるよう牛乳、コーヒー、お茶などで工夫している。以前、栄養士による献立表のチェックを受けたことはあるが、現在は職員が学びあって献立を作成している。	○	管理栄養士による定期的な栄養管理を受けることができるよう、期待したい。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間の窓から園芸センターの白樺林やサイロ、道行く人々の姿を眺めることができる。1階の居間の側にある和室にベッドを入れ、眠気が強い利用者がいつでも休むことができるようにしている。壁に大きく引き伸ばした写真を掲示し、季節感のある飾りつけをするなど一般住宅と同様の共有空間づくりを行っている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドやテーブル、椅子、箆笥、テレビや趣味の大正琴や囲碁の道具などを持ち込み、床には、カーペットを敷くなど、その人らしい居室づくりをしている。和室や洋室、広さの違いがあり、一人ひとりが居心地よく過ごせるよう、職員が整理整頓をしている。		

※  は、重点項目。

※ WAMNETに公開する際には、本様式のほか、事業所から提出された自己評価票（様式1）を添付すること。